The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「ADF-F2(The Acquaintance Description Form-Final 2)」日本版作成の試み
Author(s)	渡辺, 舞; 今川, 民雄
Citation	対人社会心理学研究. 2008, 8, p. 115-122
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10867
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

対人社会心理学研究, 8, 2008

「ADF-F2(The Acquaintance Description Form-Final 2)」日本版作成の試み[1) 2)]

渡辺　舞(北星学園大学大学院社会福祉学研究科)
今川民雄(北星学園大学社会福祉学部福祉心理学科)

本研究では友情の様々な関係形態を調査するために測定するものとして開発された Wright(1991)の The Acquaintance Description Form-Final 2 の日本版を作成し、この尺度の適用可能性を検討した。239 名(男性 132 名・女性 107 名)の大学生を調査協力者として、質問紙調査を行った。因子分析の結果から、「ポジティブな友人関係」、「不安定な友人関係」、「強い絆の友人関係」の 3 因子が抽出された。分散分析の結果、第一に「強い絆の友人関係」の因子得点において、より付き合いが長い群で得点が高くなることが示された。また、女性の方が男性よりポジティブな友人関係を持つ一方、男性は女性より不安定な友人関係を持っていた。さらに、「ポジティブな友人関係」および「強い絆の友人関係」は親密度の差異がその得点に影響を与えていることが明らかになった。

キーワード: ADF-F2、友人関係、知り合ってからの期間、付き合い頻度、親密度

問題

青年期では、人は家族と徐々に距離を置き、友人との関わりを徐々に重要視していくとされている(宮下, 1995)。青年期の中でも中学生から大学生では、その成長過程の中で、友人関係の諸側面で変化することが知られている(長沼・落合, 1998; 落合・佐藤, 1996)。榎本(1999, 2000)は中学生・高校生・大学生を調査協力者とし、友人との関係について外面的な「活動的側面」と内面的な「感情的側面」の 2 側面、及び「欲求的側面」に関して項目を収集し、それぞれの側面の発達的変化と各側面間の関連を検討している。また、前述の落合・佐藤(1996)は同性の友人とのつきあい方に焦点をあわせた項目を収集し、年齢とともにどのように変化するのかを検討をしている。また、岡田(1993, 1995)は、現代の青年期の友人関係の特徴を見出した研究において、互いの内面を開示することなく、傷つけないように接し、表面的で円滑な関係を築く傾向の側面が存在することを指摘した。以上のように本邦の友人関係研究では、青年期の調査協力者を対象とした研究が主であること、また友人関係の特定の側面に注目し、その特性を明らかにする尺度が多く作成され、使用されていることが多いという特徴があることがうかがえる。こうした傾向に対し、The Acquaintance Description Form(以下 ADF と表記)は、Wright(1985)によって友情の様々な関係形態を調査するために測定するものとして開発された尺度である。この尺度は調査協力者が、対象人物や特別な知人との関係において、項目の内容について起こりうる程度や行動の頻度のいずれかを回答する自己報告の手法として作成されたものであり、友人関係の多側面を扱い項目を収集している。ADF はその作成に際し 20 年近くの長い歳月をその発展に費やしており、最初の構造は、経験上の資源の多様性から選択された友人関係の観察を基礎としている。次の段階において、Wright(1978, 1984)は自己概念動機を基礎とした友人関係のモデルを提案した。ADF は Wright 自身の理論に基づいて項目が作成されたものである。The Acquaintance Description Form-Final 2(以下 ADF-F2 と表記)は 1991 年にその ADF の項目を改訂したものである(Wright, 1997)。ADF-F2 は、5 つのカテゴリーで構成され、14 の下位カテゴリーにそれぞれ 5 項目ずつの質問項目を有し、全 70 項目から成り立っている。第 1 カテゴリー「関係の強さ」は、対象人物との関係でどの程度付き合いをするのかを測定、第 2 カテゴリー「対人的報酬」は対象人物がどのような価値を与えてくれるかの程度を測定、第 3 カテゴリー「緊張」は対象人物の関係において、困難さや緊張を感じる程度を測定、第 4 カテゴリー「反応バイアス」は、対象人物を基本的に好意的に捉えているかを測定、第 5 カテゴリー「関係差別化」はその人物をどの程度特別な存在として捉えているかを測定するという目的で作成されたものである(Lea, 1989; Table 1 参照)。ADF-F2 は様々な言語で訳され、各国でその適用可能性が検討されてきたが、Lee & Bond(1998)は中国版を作成し、中国の大学生の入寮生を対象として、調査を行っている。ADF-F2 の中国版のうち、Wright(1991)が基本的な測定だと指摘している第 1 ～第 4 カテゴリーの項目のみを分析に使用している。その 50 項目について探索的因子分析を行ったところ、

2 因子が抽出され、第 1 因子は対人的報酬や関係の強さ、また各カテゴリーからポジティブな側面を捉えた 41 項目から構成された。第 2 因子は、関係維持の困難という緊張的な側面と捉えた項目から構成されたが、その項目の少なさから、分析には使用されなかった。第 1 因子は友人関係の強さと命名され α = .90 と高い信頼性を示した。

本研究の目的は、「ADF-F 2」の日本版を作成し、この尺度の適用可能性を検討することである。第 1 に、調査協力者を大学生とし、対象人物を親しい友人と設定することで、Wright(1991)のカテゴリーとの比較を行う。第 2 に本研究で得られたカテゴリーにおいて、友人の親密度・知り合ってからの期間・普段の付き合い頻度による比較検討を行なう。尚、青年期の友人関係においては多くの側面について性差が存在することが報告されている(榎本, 1999, 2000; 落合・佐藤, 1996; 和田, 1993)。よって本研究でも性別に分析を行うこととする。

Table 1 ADF-F2 のカテゴリー一覧

カテゴリー	下位カテゴリー
Ⅰ 関係の強さ	自発的な相互依存
	人対人
Ⅱ 対人的報酬	刺激的価値
	実用的価値
	自己肯定的価値
	自我サポート価値
	セキュリティー価値
Ⅲ 緊張・重圧	困難維持(個人)
	困難維持(状況)
Ⅳ 反応バイアス	包括的好意性
Ⅴ 関係差別化	排他性
	情緒的表現の特徴
	社会的調整
	持続性

方法

調査協力者・調査時期

札幌市内の大学生 239 名(男性 132 名・女性 107 名・平均年齢 20.06 歳 ± 1.56)を対象に質問紙調査を行った。調査は 2006 年 1 月に実施した。

質問紙の内容

(1)基本的属性: 年齢・性別・学年・所属学科を記入させた。(2)対象となる友人の想定: 調査協力者には最初に教示文において、「現在日常生活の中でよく接触する同性の友人を 5 人」を想定させ、その人物のイニシャルまたはニックネームを解答欄に記入させた。さらに、その 5 人に関してもっとも親しいと思う人を 1 番とし、以下親しいと思う順番に 5 番まで順位をつけさせた。教示文は 2 種類用意し、一方の調査協力者には、以下の質問に関して「1 番目」と順番をつけた友人に、他方の協力者には、「5 番目」の友人に関して回答するように教示した。(3)知り合ってからの期間: (2)で想定した友人と知り合ってからどれくらいの期間が経過しているかを、「3 ヶ月未満」、「3～6 ヶ月未満」、「6 ヶ月～1 年未満」、「1 年～3 年未満」、「3 年～6 年未満」、「6 年以上」の 6 項目の中から当てはまるものを選択させた。(4)付き合い頻度: (2)で想定した友人と普段どれくらいの頻度で会っているかを、「1 週間に 4 日以上」、「1 週間に 2～3 日」、「1 週間に 1 日」、「2 週間に 1 度」、「1 ヵ月に 1 度」、「2～3 ヶ月に 1 度」、「1 年に 1 度」、「ほとんど会わない」の 8 項目の中から当てはまるものを選択させた。(5)「ADF-F2」尺度: Wright(1991)が作成した「ADF-F2」70 項目を第 1 著者および第 2 著者、同研究室所属の大学院生 3 名の計 5 名で邦訳した。Wright(1997)の方法にならい、「決してそう思わない(1)」から「非常にそう思う(7)」までの 7 段階で評定させた。

なお、以下の分析においては(3)「知り合ってからの期間」の 6 カテゴリーを、調査協力者の人数を考慮して「1 年未満(n =59)」・「1 年～3 年未満(n = 58)」・「3 年以上(n = 82)」の 3 カテゴリーに統合し、(4)「付き合い頻度」の 6 カテゴリーを「1 週間に 4 日以上(n = 54)」、「1 週間に 2～3 日(n = 59)」、「1 週間に 1 日以下(n = 86)」の 3 カテゴリーに統合し、分析に使用した。

結果

全調査協力者による「ADF-F2」尺度の因子構造の検討

「ADF-F2」70 項目について、主因子解に基づく因子分析を行なった。分析の結果、初期解の固有値の減衰状況(第 1 因子から第 5 因子まで、22.34、7.34、2.99、2.15、1.93)から判断して 3 因子が採択された。これらの因子に対してプロマックス回転を行ない、因子負荷が 1 つの因子について 0.40 以上でかつ、2 因子にまたがって 0.40 以上の負荷を示さない 53 項目を選出した。その結果、第 1 因子はその友人に対して、信頼感を持ち、安心や刺激を与えてくれるかの程度に関する項目からなる「ポジティブな友人関係」、第 2 因子はその友人に対して、関係のきまずさや関係の継続に意味を見出せなくなっている程度に関する項目からなる「不安定な友人関係」、第 3 因子はその友人に対して、特別な関係性や永遠の継続を望む程度に関する項目からなる「強い絆の友人関係」と解釈された。各因子の α 係数は、.96、.86、.84

Table 2　ADF-F2 尺度日本版における因子構造(主因子法・プロマックス回転)

	1	2	3
第1因子：ポジティブな友人関係（α=.964）			
43. その友人と話し合うとき、友人は新しい視点を提供してくれる。	.895	.115	-.318
15. その友人と一緒に課題に取り組むとき、友人は新しい視点を提案してくれる。	.863	.161	-.276
45. その友人は私にとって大切な目標を理解してくれ、また実現できるように励ましてくれる。	.809	-.047	-.008
44. その友人にとって直接関係がないことでも、私がうまくいくように時間と労力を費やしてくれる。	.782	.085	-.019
1. その友人は、私には思いつけないような新しい考えを提案してくれる。	.774	.089	-.287
30. いざという時、その友人はできる限り手伝ってくれるだろう。	.751	.063	.046
35. その友人は尊敬する人である。	.747	-.020	-.008
21. 私はその友人の人柄をとても素晴らしいと思う。	.737	-.178	-.093
7. その友人は、好ましい人である。	.726	-.248	-.136
6. 私が自分の能力を発揮できた時には、その友人がそのことに気付き、誉めてくれるだろう。	.723	.038	-.039
57. 何かやりたいことを探しているとき、その友人は新しい提案をしてくれるだろう。	.706	.118	.026
63. 私はその友人の長所をすぐに言うことができる。	.700	-.071	.003
20. 私が困難な状況の時、その友人はできるだけリラックスさせてくれるだろう。	.699	.061	.074
37. その友人は口がかたいので、私は個人的なことでも気軽に話すことができる。	.694	.059	.022
34. 私が成功したり物事がうまくいったときには、その友人は一緒に喜んでくれるだろう。	.692	-.110	.107
3. その友人は、私にとって大事なことを話すのを聞いてくれる。	.689	-.155	.056
16. その友人は心から喜んで私を助けてくれたり、私の気に入ることをしていると思う。	.663	.073	.145
59. その友人と一緒に活動をすることで、私の良いところが引き出されるように思う。	.644	.167	.174
36. その友人との関係では、感情よりも重要なものがたくさんある。	.640	.229	.108
31. その友人は、私が飾らない自分でいられるようにしてくれる。	.638	-.038	.129
47. その友人と私の間で意見が食い違っても、友人は私の話をまじめに聞いてくれるだろう。	.603	-.165	.160
64. その友人との関係で前向きな気持ちでいられることは大事なことである。	.599	-.125	.103
22. その友人と一緒にいるとき、私達は互いに気持ちをよく伝えあう。	.586	-.108	.211
49. その友人は、一緒にいて楽しい人である。	.583	-.284	.121
58. 私が病気や怪我をしたとき、その友人は看病してくれるだろう。	.564	.177	.127
17. その友人の前では、本音と感情を表現しやすい。	.563	-.027	.162
48. その友人は私の成功をほめてくれ、失敗は気にしないようにしてくれる。	.559	-.068	.137
29. その友人は私が思いもよらない新しくおもしろいことに私を誘ってくれる。	.522	.044	.136
2. 私が急いでお金を必要とする時、その友人はお金を貸してくれるだろう。	.518	-.015	-.025
25. その友人と休日を一緒に過ごすためなら、私は自分の予定を調整するだろう。	.506	.127	.111
19. その友人のためなら自分のしたくないことでもできる。	.499	.032	.143
62. 大事なことがうまくできなくても、その友人は、私がだめな人間だとは思わないようにしてくれる。	.458	-.056	.234
51. その友人は私の欠点にふれないようにしてくれるので、私は友人と安心して過ごすことができる。	.447	.194	-.040
9. 私が軽率な発言をしても、その友人からからかわれたり批判されることなく、気楽に話することができる。	.431	-.168	.018
第2因子：不安定な友人関係（α=.855）			
61. その友人と触れにくい話題を話してしまうと、私達の関係は壊れてしまうだろう。	.036	.752	-.041
56. 解決できない多くの問題があるので、その友人との関係に意味を見出せなくなっている。	-.035	.711	.111
70. その友人との立場の違いが、私たちの間を気まずくさせている。	-.070	.663	.010
66. 客観的にいえば、私とその友人の関係には多くの制約がある。	.062	.654	.051
42. その友人との関係が壊れないようにつとめなければならない状況にある。	.107	.644	-.269
65. その友人は、私の性格の欠点ばかり指摘する。	-.192	.611	.198
38. その友人と私のまわりの人は、自分のことのように私達のことにあれやこれや口を出してくる。	.250	.576	.052
28. その友人と私の関係では、2人の間の気まずく張り詰めた空気を、どうすることもできない。	-.055	.560	-.068
23. その友人は、悪意のない冗談や言葉で私を困らせたりする。	.000	.532	.076
55. その友人との関係が嫌になっても、私達はその関係を続けなければならないと思う。	.109	.468	.216
24. 現実的に考えると、その友人と一緒にするのは、自分たちのためだけではない。	.237	.455	-.011
5. その友人の人との関わり方は、まわりの人と仲良くやっていくことを難しくしている。	-.231	.439	.220
第3因子：強い絆の友人関係（α=.843）			
32. 一緒にするのはその友人だけという、特別なことがある。	-.008	.132	.622
60. 私がその友人にとって「かけがえのない存在」でなかったら、私はとてもがっかりするだろう。	.085	.106	.615
46. 私はその友人との関係を他の誰からも邪魔されたくない。	.007	.186	.585
68. その友人との関係を妨げられるなら、私はとても寂しい。	.137	-.185	.567
27. 私とその友人はとても仲が良いので、その友人が遠くへ引っ越すのなら、私も一緒に引っ越したいくらいだ。	.081	.306	.519
12. もしその友人がいなくなってしまうならば、私は心にぽっかり穴があいたように思うだろう。	.309	-.025	.511
13. 私とその友人の関係は一生続くだろう。	.344	-.116	.444
因子寄与率（%）	17.81	5.18	1.39

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ
Ⅱ	-.24	
Ⅲ	.61	.04

であり、十分な内的整合性を有していた(Table 2 参照)。なお、以下の分析に関しては、因子ごとに因子得点を算出し使用した。男女別および友人想定条件別の因子得点を Table 3 に示す。

Table 3　性別・親密条件別の因子得点と *SD*

	男性		女性	
	1番目 (n=54)	5番目 (n=54)	1番目 (n=44)	5番目 (n=48)
ポジティブな友人関係	0.04 (1.00)	−0.47 (1.03)	0.50 (.66)	0.02 (.94)
不安定な友人関係	−0.01 (.95)	0.30 (.94)	−0.35 (.86)	0.00 (.96)
強い絆の友人関係	0.15 (.83)	−0.37 (.84)	0.51 (.86)	−0.23 (.96)

(　　) は*SD*

性・友人想定条件・知り合い期間による「ADF-F2」各因子得点の比較

性(男性・女性)・友人想定条件(1番目・5番目)・知り合い期間(1 年未満・1～3 年・3 年以上)によって、「ADF-F2」の各因子の因子得点に差があるかを検討するために、「ADF-F2」尺度の「ポジティブな友人関係」、「不安定な友人関係」、「強い絆の友人関係」の各因子得点に関して、性・条件・知り合い期間を被験者間要因とする 2 × 2 × 3 の 3 要因の分散分析を行なった。

「ポジティブな友人関係」では性の主効果および条件の主効果が有意であり(性: $F(1, 187) = 11.87$, $p < .01$、条件: $F(1, 187) = 12.18$, $p < .01$)、女性(0.25 点)が男性(-0.18 点)よりも、また 1 番目の友人を想定した群(0.29 点)が 5 番目を想定した群(-0.23 点)よりも、「ポジティブな友人関係」の因子得点が有意に高いことが示された。

「不安定な友人関係」では、性の主効果が有意であり($F(1, 187) = 9.79$, $p < .01$)、また期間の有意傾向の主効果が見られたが($F(2, 187) = 2.95$, $p < .10$)、性 × 条件 × 期間の 2 次の交互作用が有意であったため($F(2, 187) = 3.11$, $p < .05$)、性・条件・期間のそれぞれの水準別に単純・交互作用の検定を行なった。その結果、1 番目の友人想定条件群における性と期間の有意傾向の交互作用が見られ($F(2, 91) = 2.50$, $p < .10$)、また男性における条件と期間の有意傾向の交互作用が見られ($F(2, 101) = 2.36$, $p < .10$)、さらに、1 年～3 年の知り合い期間における性と条件の有意な交互作用が見られた($F(1, 54) = 2.36$, $p < .10$)。これらの各水準別に、単純・単純主効果の検定を行なったところ、「1 番目－1～3 年」の群において男性(0.30 点)よりも女性(-0.79 点)の「不安定な友人関係」の因子得点が高かった。また「男性－3 年以上」の群において、5 番目(0.47 点)よりも 1 番目(-0.23 点)の「不安定な友人関係」の因子得点が高いのに対し、「女性－1～3 年」の群では 5 番目(0.03 点)よりも 1 番目(-0.79 点)の「不安定な友人関係」の因子得点が有意に高いことが示された(Figure 1 参照)。

「強い絆の友人関係」では、条件の主効果が有意であり($F(1, 187) = 24.27$, $p < .001$)、1 番目(0.34 点)の友人を想定した群の方が 5 番目を想定した群(-0.30 点)よりも有意に「強い絆の友人関係」の因子得点高かった。さらに、期間の有意傾向の主効果が見られたため($F(2,187) = 2.44$, $p < .10$)、Bonferroni の多重比較をおこなったところ、知り合ってから 3 年以上の群(0.24 点)が、1 年未満(-0.25 点)の群・1～3 年(-0.07 点)の群よりも「強い絆の友人関係」の因子得点が有意に高かった。

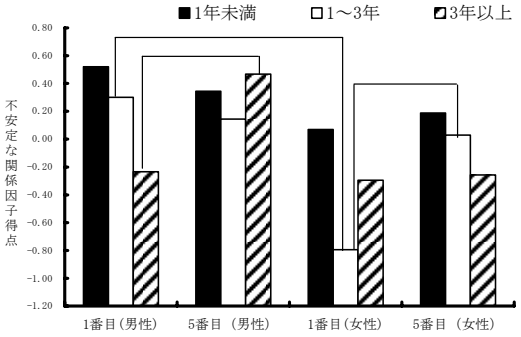

Figure 1 知り合い期間・親密条件・性別の不安定な友人関係の因子得点

性・友人想定条件・付き合い頻度による「ADF-F2」各因子得点の比較

性(男性・女性)・友人想定条件(1 番目・5 番目)・付き合い頻度(1 週間に 4 日以上・1 週間に 2～3 日・1 週間に 1 日以下)によって、「ADF-F2」の各因子の因子得点に差があるかを検討するために、「ADF-F2」尺度の「ポジティブな友人関係」、「不安定な友人関係」、「強い絆の友人関係」の各因子得点に関して、性・条件・付き合い頻度を被験者間要因とする 2 × 2 × 3 の 3 要因の分散分析を行なった。

「ポジティブな友人関係」では、条件の主効果・頻度の主効果が有意であり(条件: $F(1, 187) = 22.66$, $p < .001$、頻度: $F(2, 187) = 4.35$, $p < .05$)、性の有意傾向の主効果が見られたが($F(1, 187) = 3.85$, $p < .10$)、性 × 条件 × 頻度の 2 次の交互作用が有意であったため($F(2, 187) = 3.28$, $p < .05$)、性・条件・頻度のそれぞれの水準別に単純・交互作用の検定を行なった。その結果、女性における条件と頻度の有意傾向の交互作用が見られ($F(2, 86) = 2.85$, $p < .10$)、また 1 週間に 4 日以上の付き合い頻度における性と条件の有意傾向の交互作用が見られた($F(1, 50) = 4.00$, $p < .10$)。こ

れらの各水準別に、単純・単純主効果の検定を行なったところ、「1 番目－4 日以上」の群において女性(0.51 点)の方が男性(-0.30 点)よりも「ポジティブな友人関係」の因子得点が高かった。また、「女性－4 日以上」の群において、1 番目(0.51 点)の方が 5 番目(-1.03 点)の群よりも「ポジティブ関係」の因子得点が有意に高いことが示された。さらに「女性－5 番目」の群において、1 日以下(0.20 点)の方が 4 日以上(-1.03 点)の頻度の群よりも「ポジティブ関係」の因子得点が有意に高いことが示された(Figure 2 参照)。

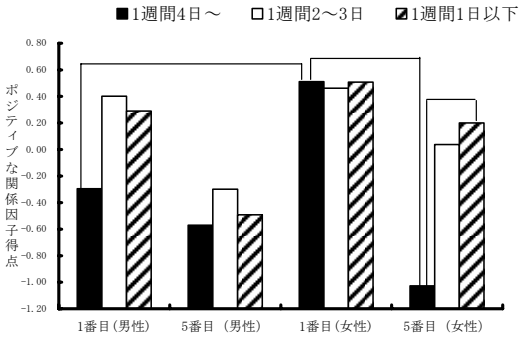

Figure 2 付き合い頻度・親密条件・性別のポジティブな友人関係の因子得点

「不安定な友人関係」では 条件の主効果が有意であり($F(1, 187) = 4.90$, $p < .05$)、5 番目の友人を想定した群(0.15 点)が 1 番目を想定した群(-0.15 点)よりも「不安定な友人関係」の因子得点が有意に高いことが示された。また、頻度の有意傾向の主効果が見られたが($F(2, 187) = 2.83$, $p < .10$)、性と条件の 1 次の交互作用が有意であったため、($F(2, 187) = 3.28$, $p < .05$)、性・条件の各水準別に単純主効果の検定を行なったところ、女性において、付き合い頻度が 2～3 日(0.09 点)の群の方が 1 日以下(-0.45 点)の群よりも「不安定な友人関係」の因子得点が有意に高く、さらに「1 日以下の付き合い頻度」の群では男性(0.13 点)の方が女性(-0.45 点)よりも「不安定な友人関係」の因子得点が有意に高いことが示された(Figure 3 参照)。

「強い絆の友人関係」では、条件の主効果が有意であったが($F(1,187) = 30.90$, $p < .001$)、性 × 条件 × 頻度の 2 次の交互作用が有意であったため($F(2, 187) = 3.07$, $p < .05$)、性・条件・頻度のそれぞれの水準別に単純・交互作用の検定を行なった。その結果、5 番目の友人想定条件群における性と頻度の有意傾向の交互作用が見られ($F(2, 96) = 2.40$, $p < .10$)、女性における条件と頻度の有意傾向の交互作用が見られ($F(2, 86) = 2.46$, $p < .10$)、また 1 週間に 4 日以上の付き合い頻度における性と条件の有意な交互作用が見られた($F(1, 50) = 5.27$, $p < .05$)。これらの各水準別に、単純・単純主効果の検定を行なったところ、「4 日以上－女性」の群において 1 番目(0.68 点)の方が 5 番目(-0.95 点)の「強い絆の友人関係」の因子得点が高かった。また、「4 日以上－1 番目」の群において、女性(0.68 点)が男性(-0.00 点)よりも「強い絆の友人関係」の因子得点が有意に高いことが示された(Figure 4 参照)。

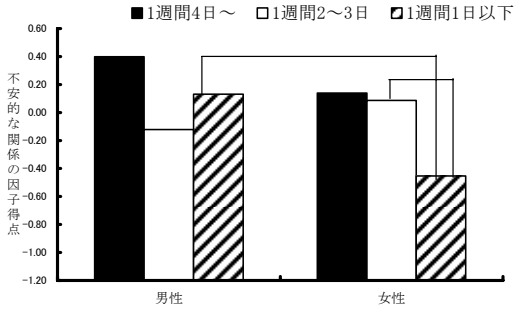

Figure 3 付き合い頻度・親密条件・性別の不安定な友人関係の因子得点

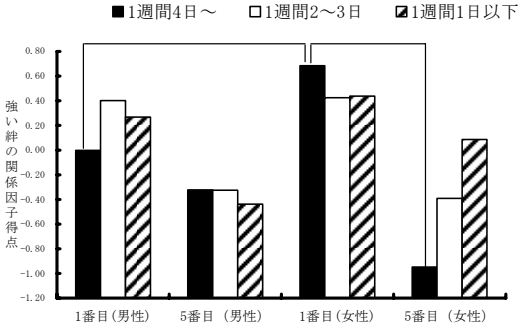

Figure 4 付き合い頻度・親密条件・性別の強い絆の友人関係の因子得点

「ADF-F2」各因子に影響を及ぼす要因の検討

「ADF-F2」の「ポジティブな友人関係」・「不安定な友人関係」・「強い絆の友人関係」の各因子に影響を及ぼす要因を検討するために「ポジティブな友人関係」・「不安定な友人関係」・「強い絆の友人関係」の各因子得点を基準変数、性・友人想定条件・知り合い期間・付き合い頻度の各カテゴリーを説明変数とする数量化理論 I 類の検定を行なった。

「ポジティブな友人関係」・「不安定な友人関係」・「強い絆の友人関係」の各 3 因子における重相関係数は、それぞれ.37、.28、.36 であった(Table 4 参照)。

「ポジティブな友人関係」・「強い絆の友人関係」では「友人想定条件」において、それぞれ、.25、.28 の偏相関係数を得ており、正の影響関係が示された。カテゴリー数量の値から、友人の想定条件ではいずれの因子に

おいても 5 番目の友人を想定した群が負の値で、1 番目の友人を想定した群が正の値になっていることから、親密さの強さが「ポジティブな友人関係」・「強い絆の友人関係」に関連することが示された。「不安的な友人関係」では、関連を示す変数はみられなかった。

Table 4 「ADF-F2」各因子に影響を及ぼす要因の偏相関係数

	第1因子 ポジティブ	第2因子 不安定	第3因子 強い絆
性	.19	.13	.11
条件	.25	.14	.28
知り合い期間	.10	.11	.14
付き合い頻度	.15	.13	.02
重相関係数 (2乗)	.37 (.14)	.28 (.08)	.36 (.13)

考察

「ADF-F2」尺度の因子構造の検討

本研究において、大学生の友人関係を対象とし、「ADF-F2」尺度の因子構造の検討を行なったところ、「ポジティブな友人関係」、「不安定な友人関係」、「強い絆の友人関係」の 3 因子を抽出した。Wright(1991)はこの尺度を作成するにあたり、様々な対人関係を想定し、5 カテゴリー(下位カテゴリー14)を作成しているが、本研究では、同じような構造を得ることが出来なかった。本研究で抽出された第 1 因子「ポジティブな友人関係」は Wright(1991)のカテゴリー分類で、第 2 カテゴリー「対人的報酬」とその人物を好ましく捉えているかを問う第 4 カテゴリー「反応バイアス」の項目が中心となっている。さらに、カテゴリーの枠を越えて、その項目がポジティブな友人関係を表す項目が加わっている。つまり、第 1 因子の項目内容を検討すると、対象人物である「その友人」が調査協力者にとって、「何かを与えてくれる存在」または「好ましいと思える存在」であるか否かといった信頼感や前向きな関係を想像させる項目構成となっている。この結果は Lee & Bond(1998)の第 1 因子「友人関係の強さ」に相当するものだと考えられる。本研究の大学生の友人関係や Lee & Bond(1998)の中国大学生にとって対象人物との関係をポジティブに認知できるか否かが、Wright(1991)の想定した様々なカテゴリーの枠を越えて、1 つの因子にまとまり、大きな要素をなっていることが示唆された結果といえよう。第 2 因子「不安定な友人関係」は、Wright(1991)のカテゴリー分類における第 3 カテゴリー「緊張」と第 5 カテゴリー「関係差別化」の下位カテゴリー「社会的調整」の項目が中心であり、「対象者」との関係に気まずさや関係を継続することへの不安さを含む内容が抽出された。第 1 因子「ポジティブな友人関係」と第 2 因子「不安定な友人関係」の因子相関係数は弱い負の相関係数しか得られておらず対極の概念ではないことが示された。このことから、第 2 因子はその友人との関係を否定するものとして捉えているのではなく、関係を継続させていく上での不安さや緊張・重圧が表現されている概念だといえよう。岡田(1993, 1995)は、現代の青年は互いの内面を開示することなく、傷つけないように接し、表面的で円滑な関係を築く傾向を指摘しているが、本研究で得られた第 2 因子はこれらの特徴と一致する内容が多く集約されたものと考えられる。第 3 因子「強い絆の友人関係」は Wright(1991)のカテゴリーでは、第 1 カテゴリー「関係の強さ」・第 5 カテゴリー「関係差別化」の下位カテゴリー「排他性」・「持続性」の項目が抽出されたものである。また、第 1 因子と第 3 因子の因子相関係数からは中程度の正の相関関係を得ている。本研究では、調査協力者に親しい友人を想定させている。このことから第 3 因子は、ポジティブな友人関係の中で対象人物を他者と差別化し、関係を特別なものをして認知するか否かが、青年期後期の大学生の友人関係で存在する因子として抽出されたといえよう。

以上のように、本研究において因子構造の検討を行ったところ、Wright(1991)の想定したカテゴリーは抽出されなかった。本研究では、大学生を調査協力者とし、対象人物を同性の親しい友人に限定している。つまり年齢群やその属性にかなり限定があるものである。一方で Wright(1991)は幅広い年齢層、同性・異性友人関係を想定した上で項目を収集している。よって本研究で得られた結果は対象人物の範囲が狭く、友人関係の様々な因子構造が分化せず統合された可能性がある。

知り合い期間・付き合い頻度による「ADF-F2」各因子の比較検討

本研究で得られた ADF-F2 の各因子について、性・友人親密条件・知り合ってからの期間および付き合い頻度の各要因によって差が見られるかを比較した。

「ポジティブな友人関係」では、知り合ってからの期間による差は見られず、女性が男性よりもまた、1 番目の友人の方が 5 番目の友人よりもその友人との関係において、より信頼し、前向きな関係と捉えていることが明らかになった。このことから、その友人との関係を「ポジティブ」だと認知するか否かは、知り合ってからの期間の長短ではなく、友人との親密度の差によるものといえよう。榎本(1999)は、感情的側面では男性よりも女性で信頼感・安定に関する感情が強いことを指摘している。本研究での第 1 因子「ポジティブな友人関係」における性差は榎本(1999)の知見と一致するものである。付き合い頻

度での比較では、1 番目の友人について 1 週間に 4 日以上の付き合い頻度がある人は、女性の方が男性よりもより友人との関係をポジティブに捉えていることが明らかになった。さらに女性では、4 日以上の付き合い頻度の場合 1 番目の友人の方が 5 番目の友人よりも得点が高く、5 番目の群では 1 日以下の付き合い頻度群が 4 日以上付き合い頻度の人よりも得点が高かった。女性の条件・付き合い頻度別の得点の推移から、1 番目の友人想定条件では、付き合い頻度に限らず、非常に高い得点を示しているのに対し、5 番目の友人に関しては、付き合い頻度が少ない方がポジティブな友人関係だと捉えていることが明らかになった。一方で、男性では、付き合い頻度によってポジティブな友人関係の認知に差がみられない。このことから女性では、選択した友人の中では親密度の低い 5 番目の人物に対しては、ほどほどの付き合いであった方が、良好な関係だと捉えていることを示唆するものであろう。数量化 I 類による結果からは、「選択友人の親密条件」が「ポジティブな友人関係」に正の影響力を示しており、その友人との関係を「ポジティブ」に捉えるかは、知り合い期間や付き合い頻度よりも、その友人との親密度による影響が強いことが示唆された。

「不安定な友人関係」の期間による比較では、全体的傾向では男性が女性よりも不安定な友人関係を認知していた。また交互作用の結果から、1 番目の友人で 1～3 年間の付き合いの群で男性が女性よりも、また女性の 1～3 年の群では 5 番目の友人が 1 番目の友人よりも不安定な友人関係だと捉えていた。1 番目の友人における性別の得点の推移から男性では知り合ってからの期間が長くなるにつれて「不安定な友人関係」の得点が低くなるのに対して、女性では 1～3 年の群の得点が他群よりも、低くなっている。本研究では大学 1～4 年生を調査協力者としている。知り合ってから 1～3 年の期間の友人では、同じ環境で生活している友人である可能性があり、一方で 3 年以上の友人とは、幼なじみを初めとした古くからの友人である。古くからの友人の場合、日常生活を送る上で、調査協力者と別の生活環境にある可能性もある。つまり、女性にとっては、非常に親密度の高い場合には、知り合ってからの期間よりも環境の違う生活を送っていることで、不安定な友人関係であると感じる度合いが高まるのに対して、男性ではそのような傾向が見られない性差を示唆したものと言える。また男性の 3 年以上の群では 5 番目の方が 1 番目の友人条件よりも「不安定な友人関係」であると捉えていることが明らかになった。このことから男性では知り合い期間が長くなり、親密度が高まることで不安定な友人関係と感じる度合いが減少していくが、親密度はそれほど高まらないまま、知り合ってからの期間が長くなると、反対に不安定な友人関係だと認知する傾向が明らかになった。付き合い頻度からの比較では、付き合い頻度が 1 週間以下の群で男性が女性よりもまた女性の付き合い頻度が 2～3 日の群の方が 1 日以下の群よりも「不安定な友人関係」だと捉えていることが明らかになった。つまり女性では、付き合い頻度が少なくなると、「関係」そのものが希薄なものとなり、関係の中で生じる不安さや気まずさを感じることも少なくなっているのに対し、男性では、付き合い頻度が少なくなることで、関係が不安定になることを感じる度合いが高まるという性差が示唆されたものであろう。

「強い絆の友人関係」の期間による比較では、1 番目が 5 番目よりも、また 3 年以上の知り合い期間の群がそれ以下の群よりもその友人と「強い絆の友人関係」であると捉えていた。このことから、より親密度の高い友人でまた、長い期間友人関係であった場合、「その友人」をかけがえのない人として捉えていることを示唆するものであり、妥当な結果が得られたものと考えられる。付き合い頻度の比較では、女性の 4 日以上の付き合い頻度の場合 1 番目の友人が 5 番目の友人よりも、また 1 番目の 4 日以上付き合い頻度の場合女性が男性よりも「強い絆」の関係であると捉えていた。このことから女性の場合接触頻度が高いと、親密度の違いによって、「強い絆」の捉え方に差が見られるが男性ではそのような傾向は見られないことが明らかになった。

以上のことから、「ADF-F2」の日本版は、想定された因子構造とは異なる結果が得られたものの、安定した構造が得ることができた。また、1 番親しい友人を想定した群では、より「ポジティブな関係」で「強い絆の関係」だと捉えていたこと、知り合ってからの期間が長い群でより「強い絆の関係」だと捉えていたことが明らかになった。よって、日本においてもある程度、信頼性と妥当性のある尺度であることが確認されたといえる。

今後の課題

本研究から見出された因子構造は、大学生の友人関係および親しい友人関係に限定されたものであり、今後様々な年齢群や広範囲の友人関係で調査実施が必要あろうと考えられる。

また、適用に際し、本邦で開発された他の友人関係尺度との関連の検討も今後必要である。

引用文献

榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化 教育心理学研究, 47, 180-190.

榎本淳子（2000）．青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連　教育心理学研究, 48, 444-453.
落合良行・佐藤有耕（1996）．青年期における友人とのつきあい方の発達的変化　教育心理学研究, 44, 55-65.
Lea, M. (1989). Factors underlying friendship: An analysis of responses on the Acquaintance Description form in relation to Wright's Friendship model. *Journal of Social and Personal Relationships*, 6, 275-292.
Lee, R. Y., & Bond, M. H. (1998). Personality and roommate friendship in Chinese culture. *Asian Journal of Social Psychology*, 1, 179-190.
宮下一博（1995）．青年期の同世代関係　落合良行・楠見孝(編)　講座生涯発達心理学第 4 巻　自己への問い直し —青年期—　金子書房　pp155-184.
長沼恭子・落合良行（1998）．同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係　青年心理学研究, 10, 35-47.
岡田　努（1993）．現代青年の友人関係に関する考察　青年心理学研究, 5, 43-55.
岡田　努（1995）．現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察　教育心理学研究, 43, 354-363.
和田　実（1993）．同性友人関係 —その性および性役割タイプによる差異— 社会心理学研究, 8, 67-75.
Wright, P. H. (1978). Toward a theory of friendship based on conception of self. *Human Communication Research*, 4, 196-207.
Wright, P. H. (1984). Self-referent motivation and the intrinsic quality of friendship. *Journal of Social and Personal Relationships*, 1, 115-130.
Wright, P. H. (1985). The acquaintance description form, In S. Duck & D. Perlman (Eds.), *Understanding personal Relationships: An interdisciplinary approach.* London: Sage. pp.39-62.
Wright, P. H. (1991). *The acquaintance description form: What it is and how to use it.* Unpublished manuscript, University of North Dakota.
Wright, P. H. (1997). *A bare bones guide to the Acquaintance Description Form-F2.*Unpublished manuscript, University of North Dakota, Grand Forks.

註

1) 本論文の一部は日本グループ・ダイナミックス学会第 53 回大会および日本社会心理学会第 47 回大会において報告した。
2) University of North Dakota の Paul H. Wright 教授には研究の実施に際し、尺度の邦訳版作成と論文投稿に関し、快く許可をいただいた。ここに、謝意を記す。

An attempt to Develop the Japanese version of the Acquaintance Description Form-Final 2

Mai WATANABE (*Graduate School of Social Welfare, Hokusei Gakuen University*)
Tamio IMAGAWA (*Dept.of Psychology for Well-being School of Social Welfare, Hokusei Gakuen University*)

We tried to develop the Japanese version of ADF-F2(the Acquaintance Description Form- Final 2; Wright , 1991)which was developed to assess the various aspects of friendship and examine if this scale would be available in Japanese students. 239 participants (132 male students and 107 female students) answered the questionnaire which consisted of ADF-F2 items and other questions. As a result of factor analysis, 3 factors were extracted which were named "positive friendship", "instable relationship" and "rigid tie relationship" respectively. Results of ANOVA, it was found, at first, that the longer the length of relationship was, the higher the factor score of"rigid tie relationship" was. Second, female students had more positive relationship than male, and male students had more instable relationship than female. Moreover a degree of intimacy with target person influenced on the factor scores of "positive friendship" and "rigid tie relationship".

Keywords: ADF-F2, friendships, period of relation, frequency of relation, intimacy.